

○中 シテ 夫ならば私の申上ませう、お留守に成ッて御座れば、餘り淋う成ましたに依て、次郎冠者が相撲を取うと申ます程に、私は終に取ッた事がないと申て、御座れば是非共にと申て、かいなを取て引立まするに依て、餘り迷惑さのま、あの床の掛物に取付てござれば、あのごとくになあ、二耶 中々二人さげまして御座る、○中 シテ 夫より右左へ取ッて引廻し、あの臺子臺天目の上へ、ずでいどうとなげられて御座るに依、あの如くになあ、二耶 中々二人 打われまして御座る、○中 シテ 此上は生ては置せられまいと存じて、ぶすをくうて死ふと思ふてなあ、二耶 中々シテ 一口喰へ共死なれもせず、二耶 二口くへ共まだ死なず、シテ 三口四口、二耶 五口、二人十口餘り皆に成る迄喰うたれ共、死なれぬ事の目出度さよ、あら頭かたや候、主 何の己頭かた、二人眞平免て被下い、〳〳〳〳、主 あのおほちやく者人たらし、どちへ行ぞ、人はないかとらへて呉い、やるまいぞ、

〔薰集類抄上〕金剛頂經香略 ○中

右七味搗篩用、蜀乾糖及濕砂糖和之合調、

蜜

〔本草和名十四〕枳椇楊玄撰音上居、一名木蜜本條、一名白石、一名樹蜜、一名木糖、一名木石、一名木實巳四名、出唐、

〔本草和名十六〕石蜜蘇敬注云、可除石字、一名石飴、一名崖蜜、木蜜、一名食蜜、土蜜巳上四名、出陶景注、白蜜今京下蜜、出蘇敬注、以名之、中、一名百花醴出墨子五行記、一名奔醴華腴出神方、

〔隨意錄六〕崖蜜與石蜜不一、崖蜜櫻桃也、石蜜有數說、或云、崖石間蠶蜜爲石蜜、或謂蔗汁爲石蜜、王楙引數說辨之、今醫家專謂石蜜、以爲水沙糖者非與、

〔倭名類聚抄十六〕蜜音密、俗云美知、說文云、蜜、甘飴也、野王按、蜂採百花、醞釀所成也、